

編集後記

『摂南大学教育学研究』第18号ができましたので、お届けいたします。

本号は、7本の研究論文と2本の実践報告論文を掲載しています。合わせて9本の論文の掲載は本誌発刊以来、最多となります。

本誌で初めての掲載となる松浦正典氏は、現在、千葉県野田市の小学校で校長をされています。研究論文1本と実践報告論文1本を投稿してくださいました。研究論文では、「野田教育研究会」の最近10年間の研究紀要の分析から、特別活動部会と総合的な学習部会のどちらも、社会的な背景により研修のテーマ・内容等が影響を受けていること、一方で特別活動部会では「学級活動」のように変わらぬテーマもあることが指摘されています。他方、実践報告論文では、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善に取り組んだ小学校の実践を報告されています。ユニバーサルデザインの視点をもって授業を工夫するようになったことが教員の指導力の向上に有効であることが示唆されています。

もう一組、本誌に初めての掲載となる山本圭三氏・樋口友紀氏は、本学経営学部にも所属しています。コロナ禍における学生の置かれた状況の変化と適応について、まさにタイムリーで重要なテーマに関する研究論文を投稿してくださいました。質問紙調査の分析の結果、遠隔授業への適応度とコロナ禍生活の受容度からなる類型によって学生の特徴を把握することが有効であり、学生が支援を必要としたときはその類型の示す特徴を踏まえたアプローチが大事であることが指摘されています。

紙幅の都合で全ての投稿者と論文概要を紹介することはできませんが、過去最大のボリュームとなる本号をお届けできることは、編集幹事としてはうれしい限りです。投稿者の皆様にお礼申し上げます。

昨年度に続き今年度もコロナに翻弄されました。感染状況は落ち着きと急拡大を繰り返し、ワクチン接種は進んだものの、また新たな変異株の出現によってその有効性が低減することも心配されています。いったいいつになれば大学の「よさ」を存分に享受できるようになるのか、「大学とはこんなものだ」「学校とはこんなものだ」「学びとはこんなものだ」と焼き付けられた若者たちがどのような世界像を展望するようになるのか。将来社会を切り開く若者を育てるために私たちも一層の研鑽を積み重ねていく所存です。ひきつづき皆様のご理解・ご助力を賜りますよう、お願いいたします。

編集委員・幹事 朝日 素明